

足利健亮先生を悼む



京都大学大学院人間・環境学研究科教授、史学研究會理事足利健亮先生は、平成十一年八月六日、急性循環不全のため滋賀県草津市内の病院で逝去された。享年六十二歳であった。ここに謹んで哀悼の意を捧げる。

先生は、昭和十一年十二月二十一日に北海道勇払郡追分村（現追分町）で出生、地元の小中学校、苫小牧東高等学校を経て、昭和三十年四月に京都大学文学部に入学、同三十四年三月に文学部史学科人文地理学専攻を卒業された。卒業論文は郷里北海道にお

ける先住民族アイヌの居住領域とその変遷に関するもので、後に『人文地理』第二〇巻第一号（昭和四三年）に「論説」として掲載されている。大学院進学後は研究テーマを日本古代の歴史地理に定められ、それは終生先生の主要なテーマとなった。初期の研究には、条里施行地における小字「クラノマチ」「クラノツボ」などの意味を探るものや、郡家に関するものなどがある（前者は『史林』第四五巻第一号所収）。

昭和三十七年に大学院博士課程を途中で終えられた先生は、藤岡謙二郎先生の主宰される教養部人文地理学教室に助手として勤務されることとなった。四年間の助手在任中には、藤岡・西村両教授を助けて、とくに東北地方の古代歴史地理調査、佐田岬半島の総合調査等の共同研究などの遂行に尽力された。

昭和四十一年に新設の追手門学院大学の文学部講師に転じられた先生は、同四十三年に大阪府立大学教養部の講師、さらに同四十六年には同助教授に昇任された。そして昭和四十九年に京都大学教養部助教授となり、同六十一年に同教授に昇任、教養部改組に伴い平成四年十月に大学院人間・環境学研究科教授に配置換えとなって逝去時に及んだ。その間、平成五年十月から同九年九月までの二期四年間、人間・環境学研究科長を併任されたが、この四年間、先生は発足なお日の浅いこの研究科に起こる各種の懸案事

項の処理に、文字どおり忙殺され、それが先生の健康を損なう原因となったのではないかと推測される。

日本古代の歴史地理を専門領域とされた先生は、恩師藤岡謙二郎先生の衣鉢を継いで、都市と交通路の問題に主たる精力を注がれた。中でも恭仁京の平面形態に関する独創的な復原案の提示（『史林』第五二巻第三号所収論文）や、畿内とその周辺における古代計画道路網の復原などは、学会に大きな影響を与えた。これらの諸研究の内、前半期のものは、『日本古代地理研究』大明堂（昭和六十年）に、また近年のものは『考証・日本古代の空間』大明堂（平成七年）に集大成されている。さらに、日本の都市の歴史地理に関しては、対象とする時代を中世・近世（とくにそれらの移行期）にまで広げ、何人かの関連研究者との論争をも交えながら、多くの独創的な研究成果をあげられた。『中近世都市の歴史地理』地人書房（昭和六十年）は、この分野での諸論文をまとめられたものである。

このように、日本の歴史地理を主たる専門とされた先生であったが、昭和六十二年に文部省在外研究員としてイギリスに出張された際には、イングランドの一農村に残る土地関係史料を発掘してそれを分析され、大学院人間・環境学研究所の紀要に発表された。先生は、この時に収集された史料の分析に加えて、平成十年

夏のイギリス再訪時に現地で行われた補充調査の結果を総合して、著書として刊行することを計画しておられた。この書物を完成されることなく逝かれたことは、日英両国の歴史地理学会にとって大きな損失であることはもとより、先生ご自身にとってもさぞ心残りであったにちがいない。

先生の学風を一言で表すことは難しいが、あえてそれをするとすれば、オリジナルな着想を大事にされたということであろう。もちろんこれは資料に基づく実証を軽視されたということを意味するわけではない。しかし、資料、とりわけ文字で書かれた資料に乏しい時代、事項に関して、いかにして事実を明らかにしていくことができるのかという、広義の歴史研究に携わる者なら誰でも直面する難問に対して、先生は、単に歴史地理学が従来用いていた資料群にとどまらず、過去の人々のものの考え方といったものまで含めて、積極的に歴史空間復原の資料とされたのである。

このような先生の学問は、専門家だけでなく一般の人々にも関心をもって受け入れられた。中でも、平成九年夏にNHK教育テレビで放映された「NHK人間大学」景観から歴史を読む——地図を解く楽しみ——は大きな反響を呼んだ。しかし、この放送に基づく同名の書物（日本放送出版協会刊）の刊行と相前後して、先生は病に倒られた。そしてついに帰らぬ人となられたの

である。京都大学の停年退官を八ヶ月後に控えてのことであった。

先生の史学研究会とのかかわりについていえば、早く『史林』第四四巻第五号（昭和三十六年）に『福井県丹生郡誌』の紹介を書かれたのを最初とし、次いで上述の二論文、さらに金田章裕・田島公両氏との共著論文（第七〇巻第三号）を発表された。最も新しいものとしては、『福井県史』資料編一六上、絵図・地図の紹介を第七四巻第一号に執筆されている。その間、本会の評議員、そして昭和六十一年からは理事を務められた。

先生のお仕事としては、これらに加えて、近畿地方各地の十指に余る市町村の史書の編纂、執筆に関与されたこと、京都府ほか

いくつかの地方自治体の文化財保護行政に指導的な役割を果たされたことなどがあげられるであろう。そうした事業にとつて歴史地理学分野の研究者の参加が不可欠であることを示された意義は、きわめて大きいといわなければならない。

筆者は先生とは専門分野をやや異にするものであり、先生のあげられたご業績について必ずしも正確に紹介することができなかったのではないかと惧れるが、先生から三十年以上にわたつて厚誼を受け、かつ最近の十年余りは先生と同じ研究室に勤務する機会を与えていただいた縁から、本文を草させていただいた。謹んでご冥福をお祈りするしだいである。（山田 誠 記）